

# 知を拓く——研究最前線

8

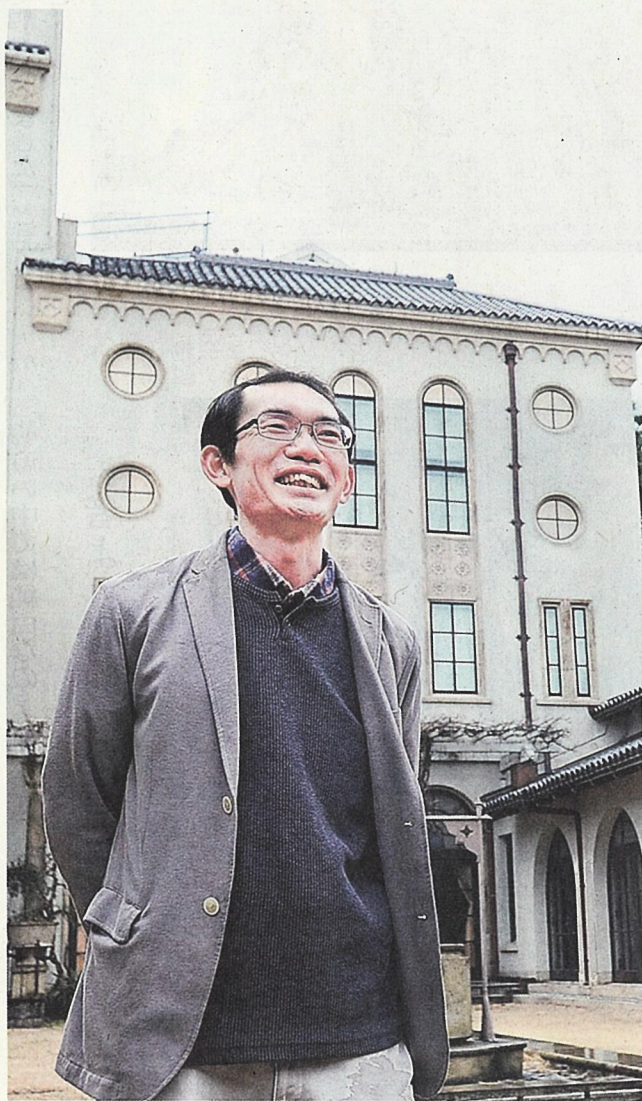
## 中国古典文学理論

中国唐代の文学者といえ、杜甫や李白、白居易などを思い浮かべるだろう。唐は中国古典詩が頂点を極めた時代とされるが、こうした詩人は知識人の頂点に立つ、ひと握りの人々だ。第一級の詩人が扱った文学理論が「上澄み」だとすれば、その下層には、識字を身につけるための理論、文字を学び終えた人が詩や手紙を書くように導く初学者向けの理論などが幾層にも重なっていた。だが、一般の人々がひと握りいた作詩の指南書は忘れ去られていく。当時のより高度な理論や、後に体系化された詩学の陰

京都大人文学研究所准教授

ながた ともゆき  
永田 知之 さん (39)

知識と美意識が時代と地域を越え伝播する実相を突きとめたい



唐代文学理論の解明を進める永田知之さん。日本でこの研究に取り組むのは少数派で、新たな領域と視座を切り開き続ける(京都市左京区・京都大人文学研究所分館)＝撮影・船越正宏

## 「詩格」の全容解明日指す

に隠れてしまったため、散逸してしまい、まとまった形で残っていない。博士課程に進むと、詩格などの研究にのめり込み、書簡作成法を記した敦煌文書や、詩格を断片的に引用した後の文献、他国に伝わった文書までを渉猟した。写本研究手法を学んだ留学先のドイ

唐代を中心とした作詩の指南書は「詩格」と総称される。その詩格を偶々目にしたのは京都大大学院時代。学部で中国文学を専攻し、大学院では唐代の文学を究めようと志したが、「これ以上進

んで人並み以上の研究はできないのではないかと行き詰まりを感じていたところだった。高名な文学者とは異なる言説が中国文学には存在することを初めて知る。だが、杜甫や李白らの文献は後世に数多く伝

わったのに詩格の文献は散逸してしまい、まとまった形で残っていない。博士課程に進むと、詩格などの研究にのめり込み、書簡作成法を記した敦煌文書や、詩格を断片的に引用した後の文献、他国に伝わった文書までを渉猟した。写本研究手法を学んだ留学先のドイ

ツ・ハンブルク大、助手に採用された京都大人文学研究所でもこうした文学理論の全容と変遷を解明してきた。

詩格には煩雑にも見える規則が多く記される。五言詩を作る際には偶数句の最後の文字を押韻しなければならず、反対に奇数句の最後は、偶数句と韻を踏む文字を使つてはならない。中国語独特の声調である「平仄」の文字を規則的に置かなければならない。内容は題から離れてはならず、起承転結をつけなければならぬ。逆に規則を覚え、使いさえすれば、「シンメトリー」を持つ均斉

が感覚的な心地よさを生み、詩を作ることで「できる」。

中国語が東アジアの共通言語だった唐代にはこうした理論が日本や朝鮮半島に伝わった。唐に渡った空海は「詩髓」など数多くの詩格を日本に持ち帰った。自ら編纂した文学理論書「文鏡秘府論」に詩格を取り込み、中国の文学理論は日本に広まる。唐は最先端の文化を誇る国であり、漢詩は日本の知識人に必須とされた素養だった。

「一般人向けに書かれた理論書はむしろ、他言語を使う日本人になじみやすい」。本国では後に顧みられなくなった理論書も、日本では後世の理論を加えるなどし、明治時代に至るまで連続と受け継がれていく。

詩格がたどった歴史は、知が越境し、形を変えながら時代を越えて継承されるダイナミズムを映し出す。そして、唐にはその知識を外国人に惜しみなく伝える自由な空間が存在した。

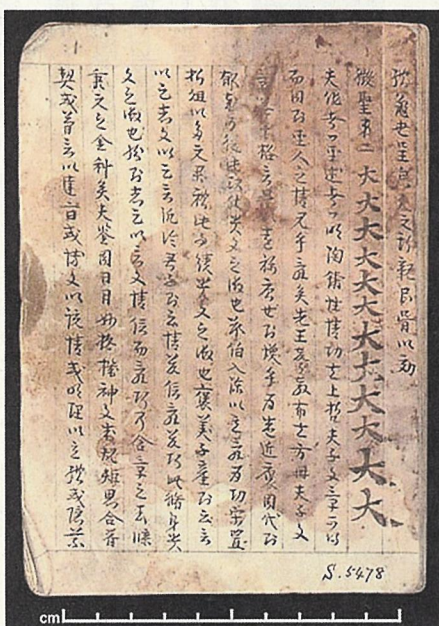
京都市左京区北白川の住宅地に立つ白亜の建物、前身の東方文化学院京都研究所以来80余年の歴史を持つ人文科学研究所分館で、研究生活を送る。学生時代は漢詩を注釈する際に我流の解釈を安易に加えるのを厳しく戒められた。半面、前

時代の文献を探し出しては裏つける作業を徹底して訓練された。京大の伝統である実証主義は血肉となつて今の研究の礎となっている。

十数年に及ぶ研究の集大成となる著作「唐代の文学理論『復古』と『創新』」を今月末に刊行する。学究肌らしい、落ち着きをたたえた語り口。対照的に、未来を語る言葉はロマンにあふれる。

「漢字は何千年も前から使われてきた。漢字を使う文化には有史以来変わらない美意識が存在する。知識や美意識が時代と地域を越えて伝播する実相を突きとめたい」

(吉永周平)



5～6世紀の文学理論書「文心雕龍(ぶんしんちょうりう)」。紙が貴重な時代だったため、子どもが書の手習いをしたとみられる「大」の文字が見える(大英図書館所蔵)

法を学んだ留学先のドイ

「一般人向けに書かれた理論書はむしろ、他言語を使う日本人になじみやすい」。本国では後に顧みられなくなった理論書も、日本では後世の理論を加えるなどし、明治時代に至るまで連続と受け継がれていく。

文化